

地域子ども・子育て活動支援助成事業 実施報告書（別紙２）

| | |
|-----|----------------|
| 団体名 | 社会福祉法人 川崎聖風福祉会 |
|-----|----------------|

| | |
|------------|--|
| 取組の名称 | てんとうむしハウス（共生型こども食堂）、こども学習支援 |
| 実施場所 | かわさき地域生活支援拠点たじま（地域交流スペース、調理活動室） |
| 対象地域 | 川崎区内 |
| 対象地域の特色・課題 | <ul style="list-style-type: none"> ・コロナ禍の影響でこども食堂が開催できない期間、フードパントリー（食糧支援）で急場を凌いできた。貧困家庭向けに、配食を開始している。 ・コロナ禍の影響で、地域住民の集いの場が減少しているが、たじま家庭センターとしては、地域交流スペースを活用して、集いの場・居場所支援を継続している。 ・相談支援の対象を、幼児から高齢者・障がい者児に関係なく、家庭をターゲットに支援していく中で、家庭内の複雑多岐な課題を抱える対象者に対し、援助希求が発信できない家庭もあり、民生委員・児童委員等の地域住民が声を上げる事もできる地域。8050問題で、地域包括支援センターが引き籠りケースを発見し、家庭支援センターとして同行してコンタクトを取る場面もある。 ・地域の重鎮（町会長・民生委員）等が高齢化で、次の地域を担う人材の確保が難しいと伺っている。 ・こども会・婦人会・自治会への加入率が低くなり、運営に支障をきたしている。 |

| | | | |
|-----------------------------|--|------------------------------|---|
| <p>取組の趣旨・目的</p> | <p>・『てんとうむしハウス』：子どもや単身高齢者、障がい者を含め、家庭尾や学校等以外で安心・安全な居場所を提供し、幼児から高齢者・障がい者までが通える共生食堂を目指す。サポーターとして、障がい者のやりがいや居場所ともなっている。参加者個々の自己肯定感を育み、地域のサポーターや施設スタッフと関わる事で、ロールモデル作りのきっかけとする事を目指す。</p> <p>・『こども学習支援』：発達に何らかの課題があるこどもや、ヤングケアラー状態の家庭もあり、介入に時間を要す。ご本人に分かりやすく説明するための教材の工夫も必要となる。中学生の大半が高校受験を控え、高校の選定に関して、卒業後の進路等も視野に入れながらの対応となっている。中間・期末試験期間は、集中して子どもが通ってきている。</p> | | |
| <p>実施内容・実施スケジュール</p> | <p>・『てんとうむしハウス』：基本：第一・第三金曜日：小学生以上を対象。春休み・夏休み・冬休みの期間は、学校等の行事を確認しながら、日中の時間に開催していく。夏休み期間、川崎市社会福祉協議会主催の「チャレンジボランティア」の生徒を受け入れて、イベント・宿題等の交流を図っていく。</p> <p>・『こども学習支援』：基本、週1日開催しているが、中学生のテスト期間は、毎日開催となる。こどもの特性に合わせた個別対応が必要となり、学習教材も学習到達度に合わせたものを購入していく。</p> | | |
| <p>参加者の年代</p> | <p>2歳から70歳代</p> | <p>定員 (1回あたり)</p> | <p>20名程度が来所され、ご家庭に持参する食数を15食と見込んでいる</p> |
| <p>実施頻度</p> | <p>こども食堂：月2回、第一・第三金曜日 学習支援：毎週水曜日＋不定期</p> | <p>活動日数 (年間)</p> | <p>こども食堂：22日 学習支援：78日</p> |

| | |
|-----------------------------------|---|
| <p>スタッフ体制</p> | <p>・たじま家庭支援センター職員 3名、施設管理栄養士 1名、地域のサポーター 2～3名で運営を行っている。かわさき地域生活支援拠点たじまの職員も、こどもとの会食等に1名が定期参加している。</p> |
| <p>連携する団体・ 連携の手法</p> | <p>・『てんとうむしハウス』: 川崎区役所・支所のみまもり支援センター、民生委員児童委員、主任児童委員、臨港中学校教育会議、川崎区社会福祉協議会、川崎市社会福祉協議会、青丘社（桜本こども食堂）等との連携。</p> <p>食糧支援を含めて、3ヶ月ごとに市社協・区社協・みまもり支援センター・青丘社等が参集し、子ども・家庭に関する情報交換と、新たな地域の居場所拠点づくりについて意見交換を行っている。</p> <p>・『こども学習支援』: 保護者・地域みまもり支援センターからの相談により対応。</p> |
| <p>取組実施により 見込まれた効果</p> | <p>こども食堂(てんとう虫)は、子どもから高齢者等を対象としており、7年8カ月間継続しています。地域に住んでいる高齢者・子どもたち等が定期的に参加されていますが、子どもたちが中学へ進学したことで、こども食堂の参加が出来なくなっている一方、田島支援学校の高等部に進学している障害をお持ちの子どもたちの居場所となっております。定期的に高等部の生徒3名が参加し、小学生の相手をするような場面も見受けられ、子どもたち自身が成長したことを感じられる場面が見られています。</p> <p>また、昨年度夏より開始した子ども食堂のお弁当配布を今年度も継続して行ないました。お弁当配布のきっかけであった家庭へ届けるところから、川崎区役所・田島支所を中心として、生活に課題がある家庭へお弁当配布を通じて、家庭に繋がることができ、宅配の量も、会場に参加する人数を上回っています。その中で、行政だけでは宅配を賄うことが出来なくなるほどの大盛況となり、その結果配布会場を作ることとなりました。3月に試験的に実施し、関係機関と配布会場の方と一緒に打ち合わせを重ね、次年度からは月1回配布会場にて、お弁当配布を行なうことが決まりました。</p> <p>次年度の展開としては配布会場を活用し、自力で取りに行ける家庭、こどもが自力で取りに行ける家庭、支援者が届けられない家庭等、精査しながらご家庭の支援へと発展できるような</p> |

仕組みを作ろうと行政と目論んでいます。

※学習支援

平成 30 年度 11 月から学習支援を開始してから、5 年目を迎えます。今年度の学習支援では、小学生が 4 名となり、毎週水曜日に実施しています。継続の子どももいれば、学習塾が閉鎖したことで、学習支援に参加をした子どももいます。小学 3・4 年生ということで、年齢も近いことから勉強が終わった後、一緒に思いつき遊ぶ場面が見られています。参加している子どもたちは、頭を掻きむしりながら国語辞典を引いて勉強をする姿が見られています。共通して漢字の書き取りが苦手としていて、比較的算数の方が取り組みやすい様子が見られます。

また、サポーターさんが 2 名へ増えたこの 1 年でした。1 人は昨年度から継続で関わってくれる 20 代女性、もう一方は川崎区社会福祉協議会からの紹介で、小児科の Dr で介護のため実家に帰ってきた男性です。子どもたちにとっては、たくさん遊んでくれる大人という印象があり、勉強にも遊びにも全力で関わっていただきました。残念ながら、就職活動のため、男性のサポーターさんは 3 月中旬で終了となっていますが、年齢が近い大人が関わることで、子どもたちにとっていい刺激を得ることができたように思えます。